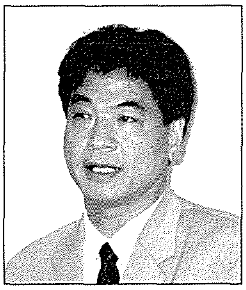
報告「グローバリゼーションに対するアジアの対応；危機、挑戦と挫折」

坪井　善明
早稲田大学政治経済学部教授

坪　井　早稲田大学の政治経済学部で「国際開発論」を教えていますが、ベトナムを中心とした政治社会史を専攻しています。第1部の高橋先生の「グローバル化と先進国政治」というお話と質をがらりと変えたお話をしたいと思っています。

はじめに―分析視角

第2セッションの軸は、日本は先進国の側面と非欧米という側面の両面をもっているという視角からグローバリゼーションの問題を考えてみたいということです。つまり近代化とかグローバリゼーションとかといっても、結局それは意識的か無意識的かは問わず欧米を手本にしているのではないか。結局アメリカの価値なりヨーロッパの価値を押しつけられるのでないか、とそれ以外の国ではその点に違和感をもっているのではないかと思います。



アジアの話をするときには、まず地域を特定したり、アジアの中に日本が入るのかどうか等のやっかいな問題があります。しかし、きょうは日本を含めた東アジア、私が専門にしている東南アジア、バングラデシュ、インドまでくらいを対象とします。その諸地域で今までと違った軸でグローバリゼーションに対して多様に対応している。その中で色々な芽、新しい考え方、新しい行動があることを皆様に紹介したいと思います。全部が成功したとは限らずに、失敗も重ねていますが、私は超楽観主義者ですので、その動きの中にある新しい芽を探っていきたいというのがきょうの私の話の大きな筋道です。

報告者紹介

坪井　善明（つぼい よしはる）
1948年　埼玉県に生まれる
1972年　東京大学法学部政治学科卒
1977－82年、84－85年　パリ大学留学を経て博士号取得（社会学）
在ヴェトナム日本大使館勤務などを経て、現在、早稲田大学政治経済学部教授
著書に『近代ヴェトナム政治社会史』（1991 東京大学出版会）『ヴェトナム―「豊かさ」への夜明け』（1994 岩波新書）『躍進アジア　ヴェトナム』（監修 1997 アジア文化交流協会）など多数

1　リージョナリズム（地域主義）の動き

（1）“もう一つの普遍主義”への挑戦

アジアがほかのラテン・アメリカやアフリカと違って、なぜヨーロッパなりアメリカに対抗できる実態として育ってきているかについては、長い歴史を見る必要があります。アジアはヨーロッパ

やアメリカよりもずっと歴史が古い。中国、インドまで含めると地球上の人口の半分以上がこの地域に住んでいます。近年経済的にも非常な速度で成長してきた。産業革命以前の世界はアジアが中心で、貿易の50％以上はアジアが占めていた。この300年でヨーロッパが主導権をとったが、このままいけば、2020年くらいにはアジアがまた貿易の半分を占めるようになるのではないか、といわれています。長期変動でいうと、この300年をカッコに入れればまたアジアが昔のように世界の中心として戻ってくるという話にもなる。

そういう意味で今まで我々が近代において、普遍主義と民主主義、資本主義、市場など、ヨーロッパ、アメリカ主導で使われてきたさまざまな言葉や概念を、一個ずつオセロ返しみたいにひっくり返して、自分たちのほうに引きつけて考えようという運動がアジアにおいてここ20～30年のうちに非常に活発になっています。その一端を紹介しながら、「もう一つの普遍主義」への挑戦というようなお話をしていきたいと思います。

日本でも今けっこうおもしろい論客が出ていまして、フランスの学界で有名な人が3人います。網野善彦、浜下武志、川勝平太の3氏です。特に浜下武志氏は、中国の近代経済史が専攻の先生ですが、中国の変動を北と南に分けて、政治が中心の北と、米作地帯で特に交易が中心の南、北中国と南中国が非常に大きな流れの中で変遷しながら発展するのが中国の歴史のダイナミズムなんだということを主張されています。今までのマルクス主義的な社会経済史の生産力の問題だけではなくて、農業生産と交易が結びついたときに国は発展して、農業生産プラス交易の一方が欠けると国がだめになるという、わりと大きな経済の著作を書かれている方です。きょうはコメンテーターに経済学や社会政策の方がおられます。私は政治学なので、経済の細かい話はコメンテーターの先生方に色々していただきたいと思います。私は非常にラフな話しかできませんけれども、浜下武志さんの考え方は非常に注目されている。川勝平太氏は海洋史観という形で、特にアジア間貿易の重要性を強調しておられることは御存知のとおりです。

(2) 意味変遷

ASEANというリージョナリズムの動きが注目されています。これはもちろんEUに刺激されたということもあります。ことしの4月に、ガタガタしたけれどもカンボジアもASEANに加盟しまして、東南アジア諸国連合・ASEAN10が成立しました。

▶第1段階　1967―1985

少しASEANの動きを見ていきたいのですけれども、1967年にASEANが発足します。そのときはタイ、インドネシア、シンガポール、マレーシア4カ国を軸とした小さな集まりでした。ASEAN研究の日本での第一人者の東大の山影（進）さんは、当初のASEAN結成の目的は反共ではなかったと言うのですけれども、ベトナム戦争たけなわのころにインドシナ3国が共産主義勢力に対抗するために、直接軍事的に反共を先に出すのではなくて、アメリカの戦略のもとで経済発展を遂げるという目的でASEANが形成されました。

▶第2段階　1986―1993

ベトナム戦争が終わって、反共・経済発展という軸は続いていたのですけれども、それが冷戦に入ってくる段階になって、「戦場から市場へ」というふうにASEANの意味内容が徐々に変わってきます。この段階では、ASEANも反共ということよりも、地域としてまとまっていこう。特に中国の影響を1国では排除できないので、小さな国がまとまって中国に対して抵抗するものとして構想されるようになってきた。ベトナム戦争が終わってインドシナ3国が荒廃して、ボートピープルとかカンボジアの内戦とか中越戦争など、さま

ざまなことを見る中で、やはりまとまっていかなくちゃいけないということで、特にカンボジア和平のときにASEAN諸国が協力して東南アジアの地域を自分たちの手でつくらなくてはいけないと協力を始めました。

ASEANについて一つ日本で見落すのは、インドネシアとベトナムはけっこう昔から仲がいいという点です。一方は社会主義を標榜する国で、他方は65年9月30日以降スハルト政権になって反共国家を形成してきますけれども、インドネシアには、戦後植民地の時代にオランダに対して独立闘争を戦ったスカルノがいて、それに対してフランスの植民地に対して独立運動を戦ったホーチミン率いるベトナムは、同じく植民地に対して独立抵抗運動をしたという連帯意識を非常に強く持っていた。その後政治体制は変わっても、互いに信頼関係を保っている。しかも、双方とも非同盟という大きな流れの中にあります。日本の場合は、自分が植民地にされたことがなくて、アジアの横のつながりの非同盟連帯が脈々とあるということにどうも目が行っていない。

たとえばカンボジア和平のときに、アリ・アラタスというインドネシアの外務大臣がジャカルタ会合を開きます。なぜジャカルタで会合が開けるかというと、ベトナムがインドネシアのやることを後ろで支えていたからです。オーストラリアもよく動きましたけれども、ASEANの中ではカンボジア和平についてインドネシアが活発に動きました。東南アジアでインドネシアの位置は非常に大きい。それがアメリカとか反共とか中国というだけでなくて、ベトナム以外の非同盟の結びつきでまとまるという部分がASEANという中にもあります。日本も相当力を入れてカンボジア和平は達成されましたけれども、現地に行ってみますと、インドネシアの兵隊はカンボジア人に好かれていることが分かります。肌の色もよく似ていることはありますが、インドネシア人の部隊はカンボジア語がペラペラのインドネシア人を連れてきていて、現地の

人と非常に融和している。カンボジアに行きますと、東南アジア同士の連帯意識は実際でき上がっているなあという感覚をはっきり持つことができます。

そういう「戦場から市場へ」と、一つの実体のあるまとまりが非常に急速に出てくるのは、ベトナムがドイモイという新しい政策をとって市場経済を導入して国を開放するというのと軌を一にしています。

▶第3段階　1993—1996

第3段階としては、カンボジア和平が終わって、ベトナムもASEANに加盟する。今までASEANはベトナムから見ると反共ブロックとして敵対していたものだった。それが約30年を経てようやく逆に仲間意識を持つようになる。

日本は中国市場が閉ざされたこともあって、60年代から東南アジアに進出して行きます。経済的進出だけではなくて、福田ドクトリンに見られるように「心と心のつながり」を主張します。政府ばかりでなく、民間でも、たとえば、トヨタ財団は、コーディネーター役で東南アジア諸国に対して「隣人を知る」プログラムを作って、隣りの国の文化を知り合う動きを側面援助しています。また、フィリピンとインドネシアとマレーシアとタイの4カ国の大学協定を結んで、その大学協定をトヨタ財団のお金で相互に交換するようなプログラムをつくったりしてきました。こうしてそれまでの

欧米の分断化に対して隣同士を知らなかったという状況を改めて、自分たちの隣人を知るという形でのつき合いが非常な速度が早まってきています。

東南アジアからイギリスやオランダやアメリカに行っていた留学生は非常に多いわけですけれども、そういう留学生自身が自分たちの足元の隣人を見出した。こうしてこの段階で、実体的にＡＳＥＡＮの一つの地域としてのまとまりが急速にできてきました。

１９９０年代には、中国１３億人、他方インドが９億５０００万人と言われていますが、インドは１９９１年から経済の自由化を始めて急速に経済が発展してきていて、たぶん２０３０年くらいには中国を抜いて人口が世界一大きくなると言われています。そうしますと、その間に挟まれたＡＳＥＡＮ１０カ国が二つの巨大国に対してまとまらないと生きていけないというのが９３年から９６年の第３段階です。この時点で東南アジアの全部の１０カ国が一つにまとまって、ＡＳＥＡＮ１０を結成する必要があるということで合意しました。

▶第４段階　1997ー

９７年７月にタイで通貨危機が起こり、それから連鎖的に韓国、インドネシアを含めて危機に見舞われました。これ以降、ＡＳＥＡＮ自身のスタンスも非常に変わってきたように思われます。それは第３段階のところで中国やインドに対抗する地域主義という芽だったのですが、ＡＳＥＡＮが動き出して、今度はアジアのリージョナル・フォーラムとかさまざまな安全保障についての会議も開催するとか、ＡＳＥＡＮを中心としてヨーロッパとの政策対話も行われるようになった。またアメリカや日本や中国も招くというふうなイニシアティブをこの２、３年急速に強めています。特に経済危機以降、経済的なグローバリゼーションと政治的なグローバリゼーションに対して各国でそれぞれ対応するのではなくて、それを加盟国が守るような一つのまとまりとしてＡＳＥＡＮを有効に活用していこうという芽が出てきました。第４段階では、グローバリズムに地域で抵抗する機構としての芽が出てきています。

(3) 手　法

それではこれから先、ＡＳＥＡＮがＥＵのように国家を超えた一つの組織になるかというと、今のところはＡＳＥＡＮはＥＵのような形を目指さないと言っています。おもしろいのは、よく言われることですが、ヨーロッパやアメリカは、機構信仰（institutionalization）、つまり、いろいろなルールをつくってそれを１個ずつ積み上げて制度を設計していく傾向がある点です。まず法的なフレームワークをつくる。議会をつくり、行政府をつくり、そして裁判所をつくる。三権分立の制度をつくり、法律をつくり規制をかけて、数値目標を掲げるのを機構信仰と言っています。

これに対して、ＡＳＥＡＮは合意形成でやっていく。常設的な事務所はつくらない。つくるとそれが官僚化してかえって権限を持つという言い方をしています。この点に関して、非常におもしろいトピックがあります。中国法制史で一つの論争になっていることですが、特に民事裁判について、中国法制史の第一人者の東大名誉教授の滋賀秀三先生が前から主張されていたことですが、中国でも日本でも裁判はある。でも裁判の内容を見ると、中国では西欧で観念されているような判決ではない。西欧では、絶対者が審判する。しかし東アジアには絶対者はいない。したがって教諭的調停というふうに先生はおっしゃるのですけれども、紛争処理の手続きは、特に東アジアでは判決ではなくて、調停は当事者が合意をしない限り決まらないという意味で「調停」である、と言われています。

西欧は神みたいな絶対者が決める。その判決に従わないとだめだというやり方を基本にしますけれども、東アジアは時間をかけて第三者を入れた

り、おどしたりすかしたりしながら、最後は双方の当事者が不承不承でも合意をしないと話が決まらない。その合意をしたということで終わるのではなくて、またそれを蒸し返すこともあるのですが、アジアの紛争解決のやり方は一刀両断的に神の視点からバンと決めて、当事者の合意なくしても強制をかけるというのではなくて、時間をかけてでもあくまでも両方の当事者の合意を形成してやる。合意が崩れたらまた紛争が再発するから、ヨーロッパから見ると何をやっているんだということになるけれども、時間をかけながらなるべく武力による紛争解決ではなくて、あくまでも当事者の合意をとってやるという方法がアジアではずっとある。長い歴史の中でこういうものがあって、必ずしも同じ裁判といっても内容は一刀両断的な判決ではなくて、非常に調停的な紛争処理方式をアジアはこしらえてきたということを滋賀先生はおっしゃっています。

こういうように、ＡＳＥＡＮはヨーロッパの見方からすると不定形で、脆弱で、しまりがないように見えますけれども、逆にすべてＥＵのやり方をやらなくていいんじゃないか。アジア的という意味で非暴力的でかつ調停型の紛争処理方式をもう少し洗練させていくという方向で、ＡＳＥＡＮがいろいろなことを今からやろうということをだんだん明確化してきています。

（4）地域の歴史の見直し

▶サーフィン文化

ＡＳＥＡＮが今まで西欧の植民地の中で１０の国に分かれていたのが、それがまとまっていくのに合わせて、主体的な歴史のとらえ方が歴史学やその他のいろいろの分野で行われています。

その一つとして地域の歴史の見直しが現在行われています。紀元前２０００年から紀元前後に南シナ海周辺では、フィリピンでもインドネシアでもベトナムでもヤヌスみたいな象の頭を持った双頭獣というイアリングを特徴とするサーフィン文化がずっと存在していました。その後、ドンソン銅鼓という青銅器の祭器がつくられる。そういうものも東南アジア各地で発見されている。海が日本では島と島を離して孤絶するようにイメージされていますけれども、南シナ海は非常に穏やかで浅い大陸棚が多いところで、海自身が交易路として有効だった。海のイメージも変えよう。人と人とを離すのではなくて、東南アジアの海は人と人とを結ぶのだ。そういう結びつきが古来ずっとあって、南シナ海はヨーロッパでいう地中海と同じようにさまざまな文明がぶつかり合ったところだという意味で、アナール派の巨匠のブローデルの『地中海世界』をもじって「南シナ海は地中海だ」という説もたくさん出てきています。

▶香辛料の原産地

そういう中で産業革命以前の貿易を見ると、医療品として用いられ、その後は食肉の腐敗防止という目的もあった胡椒やナツメグを含む香辛料の原料は、東南アジア世界にあるし、沈香とかキャラなどの香木もみんな原産地は東南アジアです。さまざまな商品を世界交易として行うが、その大きな主産地は実はヨーロッパではなくて東南アジアだった。東南アジアにあったものが中国を回ったりヨーロッパに行って、まさにそれがほしいためにラテン・アメリカに行って銀や金を取る。

実は東南アジアは、紀元前からずっと産業革命前まではさまざまなものを発信する場所だった。海域世界という意味で商人もインド商人、華人、アラブ商人。アラブ商人も色々いまして、イスラム商人もいますけれども、アルメニア人というようなキリスト教徒の商人もいる。アルメニア商人は同じキリスト教徒だというのでインドの進出に非常に役に立って、シンガポールのラッフルズホテルはアルメニア人がつくったと言われています。そういう商人たちのネットワークが実はアジア貿易をずっと支えていたのだということの研究

も蓄積されています。そういう意味で東南アジア、ASEANが単なる近代的な仕組みだけに乗っていない、さまざまなネットワークの中に支えられている、そういう機能も歴史的にも果たしてきたということが言われています。

▶多様性の中の統一

マンダラとか星雲型とか多様性の中の統一、またギャラクシーと言っている人もいますけれども、東南アジア世界は中央集権的な国民国家をつくっているのではなくて、非常に緩やかな連合体の国家なのだ、と近年主張されるようになってきました。国民国家もインドネシア、これはアメリカ人のベネディクト・アンダーソン（Benedict Anderson）が書いているように、イマジーンド・コミュニティ（「想像の共同体」）だ、と言われています。インドネシアは3000以上の島で300以上の種族という多様性の中で、「想像する共同体」として国民国家として形成してきた。

そういうものを見ると、必ずしもヨーロッパ起源なり、常にギリシア、ローマに立ち戻る国家の形成と違った形成の仕方が東南アジア、インドネシアの国民国家のつくり方にもあるはずだ。そういう意味で、インドネシアの経験を含めて東南アジアの経験が、必ずしも単なる地域的なものではなくて、ヨーロッパの経験に対してもう一つ違ったオルタナティブを指し示す、ここでいえば一つの普遍主義的なモデルとしてあるのではないかということを、このごろはあちこちで言い出されています。

そういう点で今までの国民国家ということを考えるときにも、常に意識・無意識で欧米モデルに収斂されないさまざまなモデル化がされています。こういう地域主義という動きの中でも、EUとはまったく次元は異なるが、新しい試みがASEANというレベルでもされています。

（5）情報化が進むアジア

▶根強い批判

ただ、ASEANについても根強い批判があります。ASEANは脆弱だと。特に欧米の知識人から常に言われるのは、日本人を含めてアジア人は制度設計がない。みんな分析は強いけれども、具体的にそれを統合する力が弱い。どういう違う制度設計をするかが問われています。アジアの人はいろいろなことを言っても結局欧米のコピーじゃないか、ということも強く言われています。ASEANも制度設計が弱い。違う新しいものがあるというふうに私みたいに言うのは、それはひいきの引き倒しで、実際は実体がない、やっぱりあんなのはダメなんだ。いろいろな問題点を抱えていて、特に格差の問題とか、さまざまな国の経済の発展度合いとか、文化の違い、宗教の違いを含めて、キリスト教をバックグラウンドに、GNPも20倍も違わないような非常に均質の空間を形成しながらEUをつくるのと対照的に、ASEANには、キリスト教、仏教、イスラムを含めてさまざまな宗教がある。また格差もインドネシアとほかのところを比べると100倍ぐらいあるようなASEANを、地域主義として同じように語るのはそれは単なる色めがねで見ているのだ、そういう根強い批判はあります。

▶熱気あるアジア

しかし、私は毎年3回くらい東南アジアに行っていますけれども、人々が非常に元気がいいのと、非常に早く情報を知っています。おもしろかったのは、インドネシアの危機があったときに、日本の研究者がどうやって情報を集めたかという点です。10年前に天安門のときも中国で何が起こったかはインターネットでわかったのですけれども、今、日本のインドネシア研究者は、直接ファックスやEメールや衛星通信の国際電話で

ほとんどリアルタイムでいろいろな現地の人と交流を出しています。メガワティが勝って、これからコアリッション内閣がインドネシアでつくられるというのも、ほぼ半年前から大体シュミレーションができている。

先ほど南北格差が広がるか、それとも均一になるかという論議がありましたが、東南アジアに限っていうと、情報格差が所得格差につながって、南北が切り裂かれることを私は2、3年前まで心配していたのですけれども、この危機にあって、97年からのこの2年間の少なくとも東南アジアの動きを見ますと、ベトナムでも急速に今コンピューターが導入されています。Eメールを政府が規制をかけると言いながら、こんなニュースがEメールでこんなに来るのかというくらい、私のところにも入ってきています。そういう意味で、東南アジアは我々の想像する以上に情報化が日本より進んでいる。ものすごくスピードを上げながら、自分たちの自己認識を深めて広げているという傾向が見られます。

❷ 金融危機への対応

次に金融危機への対応です。経済学者がここにおられますので後ほど詳しくは説明していただければいいのですが、IMFのconditionality、構造調整策についてタイや韓国はIMFの条件に従った。それに対してマレーシアは反対のことをしています。これはなにもアジアだけではなくて、IMFや世銀の構造調整策はアフリカなんかでも基本的に失敗している。ああいう押しつけでいいのかという話があります。マレーシアのやり方はそれに対する一つの批判を実体化したわけです。それが本当に成功するかとどうかはもう少し長い目で見なければいけないのですけれども、IMF・世銀のやり方は非常に普遍的な言い方をしながら、やはりある部分アングロ・サクソン的な普遍主義を押しつけているのではないかという根強い批判があります。

97年7月以降のアジアの経済危機は、原洋之介さんなんか一生懸命論陣を張っていますけれども、必ずしも基本的なファンダメンタルズが悪いのではなくて、金融制度が不備だったり、ヘッジファンドを中心とする短期的な資金の動きのせいだ。先ほど高橋進先生も紹介されましたけれども、国際金融の動きがまったく規制されていない。そういうことで外在的な問題と制度的な問題があるけれども、実質本当に基礎的なところまでアジアが悪かったのかというと、そうでもないということも指摘されている。今タイでもいろんな問題はありますけれども、まあ2、3年後には復調するだろうという感じになっています。97年の金融危機は高い代価を払ったけれども、学んだことも多いと言えると思います。

そういう点でASEANを中心にさまざまな金融制度、経済制度を含めてレジーム、さまざまな委員会ができたり、情報交換ができたりして、そういう意味での対応を一生懸命やっています。

その中で特にEUのユーロに触発されて、またドルに触発されて、すぐにはできなくても21世紀の前半くらいにはアジア通貨基金を考えなくちゃいけないのではないか。それがはたしてできるかできないか、特に政治的な意思の問題がありますけれども、「新宮沢構想」というような形で日本も基本的にIMFを補完する形で大きなお金を危機に陥った東南アジアに出していることもあって、はたして円通貨圏になるのか、アジア通貨基金ははたして本当に実現するのかという点についてはいろんな疑問があります。そういう意味で危機に対する対応と挫折ですぐうまくはいかないけれども、それでもそういう新しい構想が色々出てきている点が注目されます。

③ 民主化の闘い

（1）下からの民主化の提言

グローバリゼーションの中で資本なり市場経済の世界化という現象が出ていますが、もう一つ見落としてならないのは、民主主義が地球化したことです。民主主義というのも色々な定義があるのですが、さまざまな人が参加と自由を極大化して自己実現を図るという民主主義の考え方が拡がってきています。去年ノーベル経済賞を取ったアマーティア・セン（Amartya Sen）や川本隆史さんが１０年くらい前から言っていますけれども、潜在可能性（capability）にかけるというセンの、特にベンガルの飢饉を見てインドの貧しい農民を救うような形での経済学を構想して、ＵＮＤＰの人間開発論が９７年に出ますけれども、そういう形で少しずつ下からの視点が理論化されている。

バングラディシュの一番困っている人、たとえば農民のおばさんたちが１週間くらいで日本円にして２５円とか３０円を銀行から借りようとしても、銀行は担保を取ってお金持ちには貸すけれど、本当に貧しい人には貸さないという盲点を埋めるような形で、「グラミン・バンク」という、グラスルーツの金融組織が成功しています。それが一つのモデルになって、今世界じゅうに広まっていて、逆に銀行資本そのものがもう一回銀行のやり方を変えなくちゃいけないと感じるように、グラミン・バンクを手本にするという動きが出ています。

（2）活発なＮＧＯの活動

非常にびっくりするのは、たとえばカンボジアは統治不可能なアナーキーな共同体だと、言う人もいました。同じような国はソマリア、ルアンダも含めて世界じゅうに２０くらいあるというのですけれども、なぜそれでもカンボジアが成立しているか、人々がそこに住んでいるかというと、実はあそこにＣＣＣ、コミティー・オブ・コーポレーション・オブ・カンボジアというカンボジアの国際協力の委員会があって、国際ＮＧＯと国内ＮＧＯをコーディネートする組織があるからです。

カンボジアに行ってみてわかるのは、ほとんど行政が機能しない中で、だれが教育をして、民生をして、カンボジア人の生命を守っているかというと、ＮＧＯ、それも単にヨーロッパのＮＧＯだけが来ているわけではない。カンボジア人の手で多くのＮＧＯが組織されて頑張っています。欧米を本当に批判するのは欧米の中から出てくるというところが彼らの力だと思うのですけれども、国際ＮＧＯで欧米のＮＧＯは非常に立派な活動をしています。日本のＮＧＯも入っていますが、それと同時にカンボジア人の有能な人がカンボジア人のＮＧＯをつくって、カンボジア人のために動いている。

今どの国にもＮＧＯの動きがあります。チリでもペルーでもベトナムでもカンボジアでも、さまざまなところでＮＧＯという形の活発な動きがあってそれが下支えをしている。そういう意味で、人類が初めて人種とか性、宗教を超えて、みんな類的存在として地球社会で生きる人間として生来対等で自由で平等なんだという概念は、ようやく共有されてきた、と言えるという感じがします。

（3）新中間層の出現

今インドも２億人の新中間層ができて、非常に激しく変わっています。次々回の選挙くらいには３５、３６歳の女性がたぶん首相になるというくらいまでインドは来ている。日本の中ではどうもインドが視界の外に置かれていますが、これからのアジアを考える場合には、米・中・日という極ではなくて、インドと中国と東南アジアという実態、そして日本、２１世紀の２０年くらいには大きく四つの軸を考えないとたぶん成り立っていかないく

らい、今インドはものすごく変わっています。インド自身が２１世紀にはカースト制を廃止できる方向に動くというふうに言い切るインド人もいまして、まさにインド人もびっくりで、アジアは今様変わりです。

（4）南北軸も視野に

アジアの中から今までの植民地経験を含めて、今の情報化の波に乗って新しいアイデア、またそれを担う新しい人材が多く輩出している。対等でオープンで自信を持った若い人が陸続と出ている。欧米と日本との軸だけで中道左派を考えてもあまり生産性がないと思います。もう少し東南アジアや中国を含めてアジアという中で、つまり南北軸の中で、日本がどういう貢献ができるかという視点を入れることによって、「第3の道」というのか本当のセンターという考えも生きてくるのではないか。

新しい日本の生き方もたぶん我々の知の構想を東西なり欧米と日本軸よりも、もうひとつ変えて欧米の経験を学びつつ、今度は南の、少なくともアジア中心に、ラテン・アメリカ、アフリカを含めたさまざまな経験をもう一回組み入れる作業をして初めて世界の中で普遍的なセンターがつくれるのではないか。欧米先進国が右で、途上国が左だとすると、日本はまさにその真ん中、両方のかけ橋になるセンターの軸が次元としてはつくれるのじゃないかということを考えています。

大変雑駁な報告になりましたけれども、少しでも刺激になればということでお話ししました。ありがとうございました。（拍手）

コメント及び討論

山口（定）　ありがとうございました。日本での通俗的なアジア認識を打ち砕くようなお話、さらに坪井さんは残念ながら私どものプロジェクトチームのメンバーではないのですが、私どものプロジェクトチームにも貴重な示唆をちょうだいしたと思います。

それでは討論者からコメントをいただきます。

間　宮　坪井さんから大変興味深いお話を伺いました。きょうの第1セッションの高橋さんと坪井さんの話を伺っていて、従来からグローバリゼーションについて、

私の頭の中に単純な色分けではなくて、アンビヴァレント（両義的）というか複雑な感情みたいなものがあったのですが、ますます頭が混沌としてきた。何が混沌としてきたかということをお話しして、坪井さんに若干質問したいのです。

最大の点は、坪井さんは「グローバリズムに対抗する」というふうな言葉遣いをされている。では対抗してどうなるのかというと、第1セッションの高橋さんの話で懐疑派という立場があったように、何かナショナリスティックな方向に行ってしまう。高橋さんの言われたハイパー・グローバリズム、これも非常におかしいと思う。グローバリズム万歳みたいな方向で打ち上げていくのは非常におかしい。ところがそれに対抗する懐疑派的な立場もおかしい。そうすると行く道はどこなのかというと、「第3の道」ということになるのですけれども。

坪井さんはアジアをグローバリズムに対抗する

コメンテーター紹介

間宮　陽介（まみや ようすけ）
1948年　長崎県に生まれる
1972年　東京大学経済学部卒
1979年　東京大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士
神奈川大学経済学部教授を経て、現在、京都大学大学院人間・環境学研究科教授
専攻は社会経済学、経済思想史

ものとして提起されたわけです。その際グローバリズムというのはアングロ・サクソン的な市場経済、民主主義であるということも言われた。はたしてグローバリズムとアジアとを対立させるのが妥当かどうかというのが私にとっての一番大きな問題です。市場経済という場合、新自由主義的な市場主義ももちろんあります。自由にすればすべてがうまくいくというふうな考え方です。ところが経済学者の中でもケインズの場合には、そういった新自由主義というか新古典派的な市場主義に対して異議を唱えたのです。市場主義では経済自体が揺らいでしまう。ケインズは、経済システムが非常にスムースに行くようになるとかえって経済は不安定になるということを言った。それが地球的な規模で起こっているのが現在のグローバリズムだと思うのです。つまり市場経済についての議論自身、新自由主義からケインズの考えまで、いろいろな考え方がある。

それから民主主義についても、どうも最近の民主主義論はカール・シュミットの民主主義論をそのまま持ってきているような感じがある。同質的・平均的な国民というのがまずあって、それをリプレゼントというか、代表するというよりむしろ再現する。同質な国民性、感情、心情みたいなものがあって、それを表に出す、リプレゼントするのが民主主義だという理解。そういうふうに民主主義をシュミット流に解してポスト・モダン派は民主主義に批判を加えるわけです。しかし、人間というのは異質であるということを出発点に置いて、そこからデモクラシーが生まれ育ってきたということを強調する立場だってあり得るわけです。ところが最近のポスト・モダン的な議論は、前者のカール・シュミット的なデモクラシー観に拠っている。グローバリズム＝欧米的普遍主義という見方もかなり一面的な見方ではないかという気がするのです。

だからそれに対してアジア、いわばもう一つの普遍主義を持ってくるのも、表裏をひっくり返しただけではないか。坪井さんは、ＡＳＥＡＮや東アジアは機構に対して情理・信頼のネットワークに拠っていると言われた。日本も東アジアですが、日本の資本主義を見てみると、確かに一面では日本的経営等に見られるような、以心伝心的な意志疎通が行われている。ところが他方では、ヨーロッパ以上に熾烈な競争が行われている。同質的な製品、似た者同士の競争なものだから、競争がものすごくシビアになるという面が他方ではあるわけです。日本も含む東アジアの資本主義がアジア独特のものだといえるかについては、非常に疑問がある。

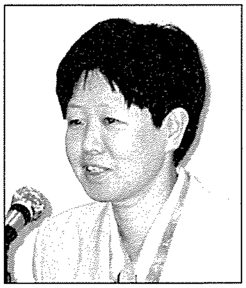
グローバリゼーションに批判を加える場合、グローバリゼーション自体をもうちょっと細かく色分けし、分析して、それに対してどういった方向を目ざしていくかということを通念にとらわれずに見ていく必要があるのではないか―というのが私の感想です。

もう一つ、これは高橋さんの報告とも関連しますけれども、コソボ紛争等もそうですけれども、冷戦後フランシス・フクヤマが「歴史の終わり」ということを言った。歴史が終わったと。そういう歴史の終点から、民族紛争や宗教対立を見ていこうとする傾向がある。ところがＮＡＴＯの国々にもかつては宗教的対立、宗教戦争はあった。その挙句、虐殺もやった。また現在の地球環境問題を生み出したのもヨーロッパ、アメリカ、日本などの国々です。最先端にある国々は、過去の何百年かの歴史の中で宗教対立、民族紛争、虐殺等々すべて経験してきた。そうして歴史が終わったというのは、余りにも自己中心的ではないか。歴史を遅れてやってきた国々は、同じことを繰り返してやっている。自分たちがやってきたことを他人がしてはならないのか。それをどうするかというのが冷戦後のかなり大きな問題ではないかという気がするのです。遅れてやってくる国々は、歴史を圧縮して、即席に市場化したり、ユニバーサルな価値観を持ったりしなければいけないという状況

になっている。

歴史は終わったのではなくて、国や地域によってラグをもっている。このラグを短縮するには一体どういった犠牲を払わなければいけないか。そのコストをだれが負担するか、というところまで考えないと、グローバリゼーションにまつわる問題をつきつめていくことができないのではないか、というのが私の感想です。

大　沢　時間が5分しかございませんので三題話みたいなことにならざるを得ません。またたぶん坪井さんご自身がご報告の後ろのほうを、時間が足りなくて大幅に飛ばしてお話しなさったんだと思うのです。だとすれば、ちょっと揚げ足取りをするようなことになってしまうのかもしれません。



私のプロフィールについてはプログラムにあるとおりでございますけれども、そこに書かれていないことの一つとして、1年に2～3カ月、タイのバンコック郊外にある国際機関の工科大学院ＡＩＴ（Asian Institute of Technology）に行っております。この工科大学院の中にジェンダーと開発に関する専攻があって、私はそこでコースを一つ持って教えているのです。バンコックにはＩＬＯ、ＥＳＣＡＰ（国連アジア太平洋経済社会委員会）、ＩＦＡＤ（国際農業開発基金）等々さまざまな国際機関の事務所がございますので、そういうところのジェンダー・スペシャリストともネットワークをつくって教育訓練や研究に当たっているわけです。

バンコック界隈で最初に注意されることが、実は坪井さんのレジュメの最後の行に並んでいるグラミン・バンク、capability、人間開発です。一つはグラミン・バンクのような試みを過度に理想化してはいけない。2番目に、capabilityを家族や世帯のレベルでとらえては大きな間違いになる。必ず個人のレベルまでおりて見なければいけない概念だということ、と同時に、本人が自分の今の状態をどう認容しているかということとは別に考える。つまり本人が受け入れている状態であっても、ウエルビーイング（幸福）ではない場合がある、ということを考えるための概念である、と注意されます。そして人間開発については、それは経済開発一本やりの今までの開発パラダイムに比べれば大変けっこうなことだが、それだけでは不十分である。ジェンダー開発、あるいはジェンダー・エンパワーメントということまで進まなければ本当の開発は考えられない。これはＵＮＤＰ（国連開発計画）自身が、９５年から人間開発指数とともにＧＥＭ（Gender Enpowerment Measurement）を発表しておりますので、ご存じの方も多いかと思います。

ＡＩＴで教えておりますと、アジアの全域から院生が来るわけですが、ネパール、パキスタン、インド、バングラデシュから来た女性たちは、タイの女性の状況を見て「こんなに女性の地位が高い」といってショックを受けるわけです。バンコックあたりで驚いていたのでは甘くて、東北地方、タイでは最も貧しい地域ですけれども、そういうところにフィールド・ワークに連れていきますと、さらにショックを受けます。そこは伝統的にマトリローカル（matrilocal）、妻方居住婚で、末娘が家産と親の扶養を継いでいくわけです。お姉さんたちは村の近くに住んでいる。男たちは出ていきます。そういう社会ですけれども、非常にショックを受けます。

しかし、イーサン（Isan、タイの東北地方のこ

コメンテーター紹介

大沢　真理（おおさわ まり）
1953年　群馬県に生まれる
1976年　東京大学経済学部卒
1981年　東京大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学。経済学博士
東京都立大学経済学部助教授などを経て、現在、東京大学社会科学研究所教授
専攻は社会政策

と）にも、近代化の波が入ってきまして、土地の所有権を登録をしなければいけない。それからファミリー・ネームもきちんとしていなければいけない、となってくると、男の名前で財産を登録する。ですからお婿さんの名前で登録し、ファミリー・ネームもお婿さんの名前にしたりするわけですが、家庭の中での力関係はまだまだ伝統的なものが保たれている部分はあります。伝統的に女性の地位が高かった。もちろん責任もタイの女性は負ってきたわけですけれども、そこに欧米的な性別分業、それから男性中心の社会のあり方をむしろ押しつけているということも、今、目の当たりに見られます。

このようなことを申しましたのは、アジアが「もう一つの普遍」になれるのかどうかにかかわるからです。それは女性の地位ということを考えたら、アジアの女性の地位はいうまでもなく低いわけですから大変おこがましいことであります。女性の地位をはかる指標は、ジェンダー・エンパワーメント測定のような指標ですから、これ自体が西側から押しつけられた尺度でアジアの社会をはかっているのではないかという批判は、当然しばしば聞きます。

今アジアの社会で、中国、ベトナムは女性の地位がかさ上げされているので除くとして、アジアの女性の地位は低い。しかしそれは、アジアの伝統的な、あるいは本来のあり方だとは考えておりません。アジアの中で研究し活動しているフェミニストとして男女平等を言うとき私は、むしろ白人やキリスト教がやってくる前、あるいは資本主義が来る前にアジアの社会が持っていたものを回復するというつもりがあります。先日も、アジアの経済危機の後どういう救済策を展開するかというプログラムの議論をしましたが、アジアの村に住み込んで活動している欧米人の男の文化人類学者が「土着のものには一切手を触れてはいけない。ジェンダー平等なんていうのは、アメリカかぶれした女が言っていることで、そんなものを村に持ち込んではいけない」と言うわけです。それに対しては私は、そうではないんだと言っているわけです。

したがって、きょうの坪井さんのご報告、地域の歴史の見直しというところに、そういうジェンダーの次元も入れ、女性の地位を回復していくという要素がしっかり入れば、「アジアはもう一つの普遍」ということをおこがましくなく言えるようになるのではないか、と私は思っております。

金　子　坪井さんのお話を興味深く聞かせていただきました。坪井さんが指摘された西欧中心主義を批判する論者の見解もそれなりにおもしろいと前から思ってはいます。しかし、私はちょっと批判の仕方が違うのです。たぶん間宮先生と私は問題意識が共通していると思いますが、第1に、西欧中心主義批判は「伝統」とか「徳」という議論に流れやすい。ナショナリズムに非常に流れやすくて、また事実そういう議論が今台頭しております。西部邁さんとか、川勝平太さんも富国有徳論ですが、彼らの書いたものを読んでいて「美しい田園の風景とか富士山のように大らかな伝統」とか言われても、一体何のことだという気持ちになります。

これはもう少し詰めていきますと、一種のオリエンタリズムになりがちな議論だと思っているのです。オリエンタリズムというのは、IMFにおけるクローニー・キャピタリズム（縁故資本主義）

コメンテーター紹介

金子　勝（かねこ まさる）
1952年　東京に生まれる
1975年　東京大学経済学部経済学科卒
1980年　東京大学大学院経済学研究科博士課程修了
茨城大学人文学部助教授などを経て、現在、法政大学経済学部教授
専攻は財政学、地方財政論、制度の経済学

批判の中に見られますし、あるいはIMFだけではなくてアメリカの主流派経済学者のほとんどがそういう意見を共有しているわけです。しかし、クローニー・キャピタリズム批判に対してオリエンタリズム的な要素を持ち出し、欧米とは違うルールがアジアにはあるんだと言うことによって、何事か今の状況で対抗できるのだろうか。西欧中心主義批判は理解できるけれども、オリエンタリズムで本当に闘えるのだろうか。

日本の企業が「飛ばし」をやって会計をごまかして、なおかつ公的資金を受け入れている。これは「伝統」なんだと言い得るのか。合意形成のあり方が日本が特殊で、情理や信頼のネットワークで系列や下請けなんかができている。それが「伝統」と言えるのか。大沢さんが提起したジェンダー問題の解決もそうなのですが、我々も欧米と共通するルールと原則を持っている。しかし同じ原則だけれども、その満たし方が我々は違うんだという言い方をすることが大事だと私は思っているのです。

私はセーフティーネットに連絡する制度やルールを論じるときには、どの国も宗教や文化の違いを反映する形でセーフティーネットの成立条件を満たしている。しかし満たしているという意味では普遍的だけれども、満たし方が違うんだという、そういう言い方をします。それも市場や社会の変化に応じて変わっていかざるを得ないというふうに考えます。そういう「普遍」と「特殊」のあり方に何か統一的な説明を与えないと、クローニー・キャピタリズムは批判し切れないだろうというのが私の意見です。

私はベネディクト・アンダーソンの「幻想の共同体」論のように言語とか宗教という形でナショナリズムを論じるのは嫌いです。にもかかわらず、私の専門の財政学に引きつけて言うと、共通のアイデンティティが存在する地域では、互酬とか再分配が受け入れやすいということがあるわけです。つまり地域の中では特定のところにお金がおりたとしても全員が納得できます。人為的につくられたコミュニティだと元の集団すべてに利益配分する利益政治を続けなければいけないけれども、共通のアイデンティティがあれば何か危機が起きたりいろいろな問題が起きたときも、特定の人にお金をあげることに皆が合意するのです。

このことは、オリエンタリズムに流れないで、同時にアジア的なアイデンティティをいかに求めることができるかという課題に私たちは向き合っていることを意味します。その際、私たちは太古の昔にまで戻る必要はなく、なぜアジアに責任を持たなければいけないかという事実から出発する必要があると思う。もちろん太平洋戦争の責任のこともあるのですが、私たちは戦争にこだわる以上に、80年代円高不況以降ずっとアジアにたくさんのお金を投じてアジアをひっかき回してきた責任の方が大きい。国内で自己資本比率を高めるという政策をとろうとすると資金をアジアからぱっと引き揚げたりもした。日本はアジアの貿易や為替取引関係を混乱させた張本人の1人である。その点をアジアでの通貨や協力の出発点にする必要があります。

ドイツ人はファシズムをどこまで反省してるのか疑わしいと思う部分もありますが、とりあえずみんな謝って回って、いつの間にかちゃっかりマルクがEUの中で主たる通貨になってしまう。ジョークですが、日本人はエコノミック・アニマルならエコノミック・アニマルらしく、しっかり戦争責任について謝って商売をするというのに徹したほうが、ずっといいと思う。そのうえで、85年以降の日本の投資のあり方、その後のひっかき回しを反省しつつ、自国の利益追求だけでなく、アジア諸国のニーズにこたえていく必要があると思います。ところが、我々の国は非常に微妙なところでアジア通貨基金を形成することに踏み切れませんでした。今ADB（Asian Development Bank）の中にアジア通貨危機救済基金があるのですが、額もずっと小さいし、下手するとばらまき政治に

なります。新宮沢構想はほとんどばらまき政策で、原理原則がない。本格的に方向転換する必要があります。

坪井さんは、アジア経済は2年、3年で回復するとおっしゃいましたが、これ難しいですね。どうなるかわからない要素が幾つもある。アジアは今輸出依存で成長していますから、国際通貨がちょっと振れればすぐ危うくなる。依然として不良債権は増加しております。日本もそうですけれども、銀行の貸出伸び率がずっとマイナスを続けている。信用収縮が続いている。従って輸出で稼がなければいけないという状況です。この中で日本のアジアからの輸入受入策は一貫してないのです。輸入をもう少し高めていかなければいけなかったはずです。通貨や貿易の領域というゼニカネの利益の世界をまず反省して、アジアと仲よくしていくというもっと割り切った考え方をしたほうがリアリティがあると思います。

山口（定）　3人の方からいろいろな問題点の指摘がございましたが、坪井さんからお答えいただきたい。

坪　井　間宮さんから、グローバリゼーションについてしっかりした細かな論議をする必要があるとご指摘いただきました。おっしゃるとおりです。私も新古典派とか新自由主義に対してケインズ主義が異議を唱えているということについては少しは知っているつもりです。こういう短い時間の中で資本主義問題に関して、経済学者と一緒に細かい議論に踏み込むというのあれば準備して議論しますけれども、きょうはそういう場ではないと思ったわけです。

私は戦略的な意味でお話したわけです。私はフランス語で論文を書いたことがあって、パリ大学でPh.D（博士号）を持っているのですが、フランス人とベトナムやアジアの話をすると、どうしてもフランス語で語り切れないところが残る。フランス人の友だちから「おまえこうだろう」と言われると、それから漏れ来る現実があって、どうもこれはフランス語では説明できないなというういらつきがすごくあるのです。おまえら、なんでベトナム語なり日本語でしゃべらないんだ、という気持ちがありつつも、結局英語やフランス語でしゃべらないと、カッコつきの普遍的ではないというジレンマがいつもあります。

他方、金子さんがおっしゃるように、アジア的価値でヨーロッパに対抗するとか、グローバリゼーションに対抗するというふうになると、ナショナリズムに引っ張られて、川勝平太さんわけのわからない生態史観をぶち、危ないというのはよくわかります。

では、その中でどういうふうな戦略を立てればいいかを考えるときに、日本の知識人と話をしていて非常にいらつくのは、日本の知識人の中で、たとえばガンジーのノンバイオレンス・ムーブメント（非暴力運動）みたいな、パワー・ポリティックス（力の政治）に本当に対抗し、インドの伝統を背負いながら一つの普遍的な力を持つという運動をどこまで理解できているのかということです。つまり我々の知の構造そのものを変える必要がある。

２１世紀に日本が変わるためには三つの軸を変えなければいけない。一つは、人間関係を上下関係で見るのではなく、対等の関係で見る。上下関係の軸から水平の軸に変える。2番目は、日本をクローズド・ソサエティ（閉じた社会）からオープンのソサエティにする。3番目は、過去志向から未来志向。過去志向は何かというと「前例がない」ということ。日本は前例踏襲しかしないんじゃないか。新しいルールをつくって、それにかけるという勇気もない。そういう意味で過去志向から未来志向に変えなくちゃいけない。このように軸を根本的に変える必要がある。

そのときにこういう研究会の場に意識的に参加してくださっている方にメッセージとして言いたいのは、確かにナショナリスティックで危ない道かもしれないけれども、やっぱり越えなければいけな

い課題なんだから、もう少し知の領域を途上国のほうにも向けてほしいということです。たとえば途上国の人と一緒に仕事をしてほしい。私は、日本人だけで何かこれから新しいものをつくれるとはとうてい思っていない。途上国の人と、まさに大沢さんがなさっているように、いろんな国の人と一緒にやることが大切だ。確かに間宮さんがおっしゃるようにグローバリゼーションに対抗するという軸があるか。金子さんがおっしゃるように、伝統とかそういうものは非常に危ういことは事実ですけれども、かといって、じゃあ世界を全部同じ色をした社会にしていいのか。やはりその国の固有の文化や固有の価値はそれぞれで主張することがあっていいのじゃないかと思います。

大沢さんがおっしゃるように、女性の地位を見るアジアが“もう一つの普遍”を主張するのは確かに非常におこがましい。特にネパール、インド、パキスタンでは女性がものすごく隷属した地位にあることは事実です。私がジェンダーの問題を語る資格はあまりないと思いますが、日本ではジェンダー問題研究は、大事だといいながら、ほとんどいつも等閑視されているという意味では途上国研究とよく似ているのです。ただし、ジェンダー論だけで見るのも半分の解明でしかないという感じはします。

フロアからの質問・意見

山口（定）　せっかく白熱した議論になってきていますので、討論者の間でもう一往復やっていただきたい感じがするのですが、その前にフロアから質問、発言したい方があると思いますので、まずそちらを優先したいと思います。

質　問　私がお伺いしたいのは、アジア地域において予防外交や安全保障という政治の力で紛争を抑制できる部分と、坪井先生がおっしゃっていたアジア的な合意形成が仮にあるとすればそれで抑制できる部分との関係をどう整理すればいいか。たとえば温暖で波の静かな南シナ海を石油のタンカーが運行することをめぐって利権争いが実際に起きつつある中で、どういう形で安全網を張りめぐらせていくことができるのかについて、教えていただきたい。

坪　井　私は、合意形成のあり方でEUみたいに三権分立の制度をつくるやり方が今は基本だけれども、東アジアの裁判では、調停という形で時間はかかるけれども、当事者間の合意をとりながら紛争処理をしていく。必ずしもそれは、民事訴訟のようなときにはあまり強制力という担保を考えなくて行う伝統があったという話をしたつもりです。

今出された石油タンカーの例や環境問題についてもそうですけれども、米本晶平さんも日本海の環境保全をつくるため日本がイニシアティブをとって条約をつくって、バルト海があるような形での合意形成なり、その環境を守る地域の集団的な一つのレジーム、そういう機構をつくれと言っています。たとえばタンカーの処理について東南アジア諸国内にさまざまな環境汚染なり事故が起こったときの対策、補償を含めたそういう意味でのレジームなり機構をちゃんとつくるということにもう少し積極的になることは、一つの方法としてあると思うのです。そういう合意形成で強制力、武力を後ろ盾としない紛争のやり方をもう少し詰めていろんなところで考えるという観点が、アジア地域協力では今まであまりなかった。それで全部が解決されるとは限りませんけれども、まずそういうこともやるべきではないか。そういう発想が今まであまりなかったのじゃないかということを提起したのです。

山口（定）　第1セッションの討論者、報告者も含めて、議論を継続していただけたらと思います。

金　子　私もインド、スリランカ、中国、韓国を勉強しており、何度か国際援助機関の調査に協力させられたこともあります。インドの現実を見たとき

に、21世紀でカースト制がなくなるなんていう話は信じないほうがいいと思います。インドでガンジーという人は確かに立派だけれども、ガンジーが一番最初に原点で伝統を強調していたわけです。パンチャーヤット、村です。ガンジーがパンチャーヤットに返れと言ったときに、アンベードカルという不可触賤民のリーダーが「ガンジー爺よ、待てよ。そこへ戻っていったら我々は生きる場所がない」と激しくガンジーに抵抗した。そういう歴史が実はあるわけです。ついに1992年に憲法改正でパンチャーヤットに議会選挙が持ち込まれた。この憲法改正では、議員数のうち女性や低カーストを3分の1は入れなければいけないという規定が入った。ところが、どこかの村で低カーストの女性議員が出たら強姦をされてしまったという事例が幾つも報告されています。

それでは社会主義とか非同盟とかいろいろなシンボルを失った後のインドはどうなっているか。BJP（インド人民党）がヒンドゥー原理主義で激しく、宗教対立がむしろ市場経済化とともに激しくなっているわけです。国の中の混乱が一層深まってくると、カシミール問題を蒸し返して目を外に向けたり、ご存じのように核を保有するに至るわけです。

私の先程のコメントの中で一つ断っておかなければいけないのは、私はグローバリズムに対して、アジアで貿易や通貨について強力な基金の設立を含む協力関係について、もう一回動き出さなければいけない、ということをずっと積極的に主張してきています。「おまえはいつから石原慎太郎になったんだ」と非難されるのを覚悟で、先手を打ってずっと言い続けているわけです。リージョナルなレベルでちゃんとした対応策を持って、グローバルな戦略を持たなければいけないと言い続けてきているわけです。

にもかかわらず、アジアがまとまらなければいけないときのシンボルを妙なところに置かないほうがいいという意見です。無理にアジアの政治の矛盾を覆い隠すよりは、きちんとそういうものを見据えながら、一体客観的になぜ必要かという根拠を特定して、そのためにまとまるんだという必要性をちゃんと明示する必要がある。そこらがはっきりしないと、どうも情緒的な議論は元気になるけれども、具体的に何をしたらいいか、相手とどういうふうに切り結んでいけるのかというところが実ははっきりしません。結果的には癒しになるのではないか思います。プラクティカルなレベルで何をどうすべきかということに徹することが大事だと思います。

坪　井　私が言っているのは、単に情緒的なことではなくて、ある部分どういうアプローチと方策を持ってやるべきかというを言っているつもりです。ただ、カースト制がなくなるといっても、ガンジーは結局暗殺されてインドは変わらない部分は確かにあるけれども、でも今の大統領が不可触賤民のクラスから出てきてそれだけ尊敬を受けているというのも事実なわけです。21世紀にカースト制がなくなるというふうに頑張っているインドの友人もいて、それもまったく幻想だとはいま言えない。インドの中でも非常に根本的に構造的に変わっている部分もある。50年前、少なくとも独立当時には、不可触賤民が個人的に尊敬を受けて大統領になるということ自体考えられなかった。そういう変化があるという感じは私はします。

まとめ

山口（定）　それでは最後の締めの言葉を申し上げます。

研究会はこれからが本番で、どういう課題があるのか、それについてどのようにまとめていくのかについて議論を深めていく予定にしております。きょうの討論を聞いてお分かりのように幾つかの大変な課題があるなあということがはっきり

わかってきたということです。その課題をごく簡単に申し上げておきたいと思います。

まず第1セッションで、中道左派の問題について高橋さんから九つの指標を紹介いただいて、これは皆さん異議がないということであったわけですが、日本に持ってきたときにそれはどういうことになるのかということについては、私どもの研究会としてはこれから本格的に議論しなければいけない。まだそんなことをやっているのかと言われるかもしれませんが、そう思います。

特にその中で安全保障の問題がクローズアップされたと思うのです。これが大変な難物でして、憲法論議について国会に調査会ができるという新しい状況もありますし、常々学生のゼミでの発言等々を聞いていましても、とにかく私どもの世代のころとはずいぶん違った、一遍白紙に戻ったような状況がございます。国会でそういう議論の場が設定されますから、当然これからはマスコミを通じて現在の憲法、特に安全保障のシステムをどうするかということは機会あるごとに議論される重大なテーマになると思います。それに対して我々がどういう解答を持つことができるだろうか。きょうの話の中では高橋さんは「平和基本法」ということを言われました。山口二郎さんはかつて「創憲論」でないと護憲の立場は貫けないということをおっしゃった。これから本格的にその議論の値打ちがあるかどうかが問われる局面になるのではないかと思います。日本の安全保障をどうするかはあらためて議論をしなければならない大変な問題だと思います。

第2セッションの議論は、経済学者中心に展開されました。私は金子さんや大沢さんの日ごろのお仕事に大変感服している立場でございますが、政治学者と経済学者の議論はこれから詰めていかなければなりません。私は実は立命館大学の政策科学部におりまして、政策研究は学際的な研究でなければならないということをモットーにした学部にいて、責任者も務めたのですが、それぞれのよって立つ拠点、経済学とか法律学とか経営学とか政治学など、長年培ってきた拠点を異にする人が、相互にどれだけ詰めた議論をできるかは本当に難しいということを体験しています。私ども幸いにしてそうそうたる方々の間でそういう学際的な詰めた議論がやれる入り口に来ておりますし、議論をするような基本的な人間関係のベースが大変うまくいっている研究会ではないか。そういうきちんとした議論ができるベースもやっとできてきているという段階ではないかと思います。

そこで安全保障の問題を議論するときには、私がここでまとめの言葉として一方的に自分の見解を言うことはできませんが、金子さんのような議論では安全保障の問題は議論できないのではないかという気がするのです。これは経済安全保障になるとまた別かもしれませんが。

私が大変困るのは、私なりに感想がありますし、言いたいことはあるのですが、それを一方的に申し上げることはできない。会全体のまとめという形でしか申し上げられません。それでいくと今言いましたような大きな課題がずしりとあることが確認できたということで、それに向かって取り組める条件も、1年間やってきましたから、まあまあできてきたのではないかということでございます。

大変不充分で申しわけございませんが、これで私の結びの言葉ということにさせていただきます。きょうは天気が悪い中、たくさん御参加いただき、最後までおつき合いいただきまして、本当にありがとうございました。報告者の方々、討論者の方々にも心からお礼申し上げます。(拍手)